

[A] 源頼朝の死去—テキスト P25 対応—

1199年、「鎌倉殿」・「右大将(源頼朝が1190年に任命された右近衛大将の略)」・「二品」などのあだ名をもつ鎌倉幕府初代将軍の源頼朝が亡くなった。頼朝の死因については糖尿病説・亡霊説・暗殺説だとか諸説あるけど、ここは前年に落馬したことが原因で容態が悪化したという一般的な説にしておこう。

なお、律令制では位階に「品」を用いることがあり、源頼朝は1189年に「正二位」の位階に昇進している。「二品」とも言われる。そのため、「守護・地頭設置の経緯(1185)」の史料(出典は『吾妻鏡』という鎌倉幕府が編纂した歴史書)が出題された場合、文中に出てくる「二品」とは誰かと問われたら「正二位」の源頼朝と答えてくれればいい。

ただね、面倒くさいことに、頼朝の妻で「尼将軍」というあだ名で有名な北条政子も、1218年に「従二位」の位階に任じられているので、北条政子も「二品」ということになり、「承久の乱における尼将軍の演説(1221)」の史料((出典は同じく『吾妻鏡』)が出題された場合、文中に出てくる「二品」とは誰かと問われたら「従二位」の北条政子と答えなければいけない。

まあ、源頼朝の位階が正二位で、北条政子の位階が従二位だから、どちらも「二品」ということになるんだけど、本音を言ってしまうとそんな個人の位階なんて言われてもピンとこない(笑)。なので、本来の意味とは違うけど「二品?よくわかんねえけど、二人で一つの夫婦って意味で、頼朝と政子のことなんじゃね?」と考えてくれればいい。そして、その史料で「二品」がどちらかを判別するコツは、頼朝が死去する1199年までの時期だったら源頼朝、頼朝が死去した1199年以降の時期だったら北条政子と考えてくれるといいかな。

<史料問題における「二品」が誰を指すか判別するコツ>

源頼朝が死去する1199年前なら「二品」は源頼朝

→「守護・地頭の設置の経緯(1185)」で出題される(出典は鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』)

源頼朝が死去した1199年後なら「二品」は北条政子

→「承久の乱における尼将軍の演説(1221)」で出題される(出典は鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』)

[B] 北条氏による有力御家人の排斥—テキスト P25 対応—

さて、カリスマ的な存在である「ミスター鎌倉殿(ミスター一説売巨人の長嶋茂雄に置き換えてみるとわかりやすい)」である源頼朝が亡くなったことで、「バカ息子(長嶋茂雄の息子である長嶋一茂に置き換えてみるとわかりやすい)」と呼ばれる源頼家(源頼朝と北条政子の間に生まれた嫡男)が2代目将軍には就任した。でも家督を相続したのはわずか18歳であったため、母方の実家である北条氏を中心とした有力御家人13人による合議制(複数人による話し合い制)がとられて、頼家は無視される形になってしまった。

ただ、特に早慶上智・学習院などの難関私大を受験する予定がない生徒、共通テストのみ必要な生徒は以下のことを押さえておくだけで十分だ。

源頼朝の死後に有力御家人13人による合議制がとられた中で、中心となったのは将軍家の実家である北条氏の北条時政・北条義時父子だ。そして、その北条氏中心な体制に不満をもった有力御家人が北条氏と対立して、1200~1213年の間に4人の有力御家人が排斥されていくことになる。

<有力御家人13人>

- ①北条時政(父)・北条義時(子)
- ②北条氏と協調した下級貴族(公家)
大江広元(政所別当)・中原親能
三善康信(問注所執事)・二階堂行政
- ③北条氏と協調した御家人(武士)
三浦義澄・安達盛長
足立遠元・八田知家
- ④北条氏と対立した御家人(武士)
梶原景時・比企能員
(畠山重忠)・和田義盛(侍所別当)
※畠山重忠は有力御家人13人には含まれない

それが**北条時政**の時に起きた**1200年の梶原景時の乱**、**1203年の比企能員の乱**、**1205年の畠山重忠の乱**、そして、時政が引退したことで跡を引き継いだ**北条義時**の時に起きた**1213年の和田合戦(和田義盛の乱)**の4つで、これらの反乱の順番や年号と人物名を押さえて基本的には十分。なので、これらは以下の語呂で押さえておけば大丈夫だね。

＜北条氏による有力御家人排斥の覚え方＞

「火事はフリーダイヤル、ヒッキーさん畑(はたけ)仕事(しごと)はダルいっす」

→火事は(梶原)フリーダイヤル(0120)、ヒッキー(比企)さん(3)

はたけし(畠山重忠)ご(5)とは(わ)ダ(和田)ルいっす(13)

※語呂は、火事が起きたらフリーダイヤル(0120で始まる)「ヒッキーさん(引きこもりさんにとって)畑仕事はダルいっす」におかけ下さい、という意味(だいたい意味は通じると思う)。

※フリーダイヤルの「0120」は1200年を指し、以降は120に「3」・「5」・「13」を足せばよい

なお、**北条時政**は**1203年の比企能員の乱**後に2代将軍の**源頼家**に代えて弟の**源実朝**を3代将軍に就けて、さらに大江広元と並んで**政所**別当に就任して権力を握ったものの、調子に乗りすぎて源実朝の暗殺まで計画しちゃったことでブチ切れた娘の政子と息子の義時に伊豆に引退させられている。

そして、息子の**北条義時**は親父の**政所**別当を引き継ぎ、**1213年の和田合戦(和田義盛の乱)**で**侍所**別当を務めていた和田義盛を滅ぼしたことで、これ以降義時が**政所**別当と**侍所**別当を兼任することになる。これ以降、この政務一般を統括する**政所**別当と、御家人を統率する**侍所**別当を兼任することで将軍の政治を補佐する役職を**執権**と呼ぶようになるんだ(ゆえに、政所・侍所別当を兼任するようになった北条義時を初代執権とカウントするのが本来は正しいんだけど、親父の北条時政が政所別当に就任した頃には幕府における専制を確立していたので、違和感はあるだろうけど北条時政を初代執権、北条義時を2代執権とカウントする)。

さて、ここから説明する内容は早慶上智・学習院などの難関私大で問われる細かい内容なので、当てはまらない生徒は— [C] 源氏将軍家の断絶—まで読み飛ばして構わない。ただ、上記のような丸暗記的な人物を覚えさせるだけではつまらないし、なぜこうした北条氏による排斥事件が起きたのかという細かい部分の説明をしていこう。

13人の合議制を行っていた有力御家人の中で頼家に重用されていたのが**梶原景時**(石橋山の戦いで敗れた頼朝が洞窟に隠れていた時に命を助けてくれた人だね)。ただ、この人は頼朝・頼家からは信頼されていたけど、御家人たちの行動を監視する役割だったこともあって他の御家人たちからは恨みを買っていた。そして、頼朝死後の翌年**1200年**に総スカンを食らっていた御家人たちに攻め滅ぼされてしまいましたとき(これを**梶原景時の乱**という)。

梶原景時を失った源頼家にとって、こうなると唯一支えとなる存在となるのは舅の**比企能員**だけだ。比企能員は娘を頼家の側室として嫁がせているので頼家の義父であり、その娘と頼家の間には6歳になる**一幡**も生まれていたからね。つまり、もし嫡男の一幡が次の将軍になれば比企能員は外祖父ということになるので、権力を握れる可能性があったわけだ。

これを警戒したのが現将軍の源頼家の外祖父にあたる北条時政で…、「だったら比企能員を呼び出して殺しちゃって、ついでに一幡も殺しておいて、頼家の弟である千幡(のちの源実朝)を将軍に就ければ引き続き外祖父の座は安泰だな」ってことで、**1203年**に北条氏によって比企能員と**一幡**が滅ぼされてしまったのが**比企能員の乱**だ。

これに対して、当時重病に陥っていた頼家は激怒して北条時政を討伐しようとしたんだけど、頼家に従う者はほとんどおらず、北条時政によって将軍を廃されて伊豆の**修禪寺**に幽閉されることになり、代わって頼家の弟の千幡が**源実朝**として3代将軍に就任することになるんだ(その翌年、修禪寺で暮らしていた源頼家は北条時政の手勢によって入浴中に暗殺されてしまう)。

なお、その頼家の墓は伊豆市修禅寺の近くにあるので温泉旅行がてらに行ってみるといいかもね。靈感のない僕でも見た瞬間に近づかない方が良さそうだなと感じたけど、友人が「これ誰のお墓？」と言うので、「將軍だった人のすごいお墓だから触ればご利益あるかもよ？」と伝えたら、躊躇なく触っていた友人はその夜に金縛りにあったそうなの…。なお、その友人はいつものあの人です(笑)。

さて、1203年に源実朝が3代將軍に就任したものの12歳であったため、その幼い実朝に代わって政務を取り仕切ったため北条時政は大江広元と並ぶ形で政所別当に就任している。でも、ここまでやりたい放題やっているのに、時政はその後にもっととんでもないことを計画していた(この計画については後述する)。その時政にとって邪魔になりそうだったのが有力御家人の皇山重忠。皇山重忠は源義経による鴨越の逆落としの戦術で有名な一ノ谷の戦いにも従軍していて、自分の馬がビビって崖から降りられなかったら「しょうがねえ、俺が担いで降りてやるか！」って程の豪腕の持ち主なんだけど、北条時政によって1205年に滅ぼされてしまった(これを皇山重忠の乱という)。

そして、ここまで来るともう完全に調子に乗ってしまったのが北条時政(この人の頼朝死後の行動については野心だらけで僕もついていけない)。今度は、3代將軍の源実朝を暗殺して、自分の娘婿にあたる平賀朝雅を將軍に擁立しようというとんでもない計画を立てていた(これを牧氏の変という)。これは、将来的に將軍家の源実朝の子孫に有能な人物が出てきた場合、北条氏が権力を失うことを想定して、將軍に自分の言いなりになる人物を就けようとしたのだろう。

北条時政「よいですか？実朝を殺したら平賀殿が將軍に就いてくださるよ？」

平賀朝雅「そうしたら僕は將軍に就けるし、お義父さんが実権を握れるわけですよ。」

北条時政「そういうことよ。」

平賀朝雅「お義父さんも悪ですのう。ふふふ。」

北条時政「そういうお主も悪よのう。ぐふふふ。」

でも、この計画はもちろん時政の娘であり実朝の母である北条政子、そして息子の義時の耳にも届く。いわゆる壁に耳あり障子に目あり、隣には政子あり的な状態(これがある意味一番怖え…)。

北条政子「ちょっとお父ちゃん！どういうことよ！」

北条時政「な、な、何のことだ？」

北条政子「何で実朝を暗殺する必要があるのよ！確かに、頼家は暴君的部分が多かったから暗殺されるのはしょうがないかもしれないけど、実朝は何も悪いことしてないじゃない！」

北条時政「そ、そ、それはだな…！」

北条時政「最近のお父ちゃん暴走しすぎよ！義時、あんたもそう思うでしょ!？」

北条義時「うん、最近のお父さんはやりすぎでおかしいと思う。」

北条時政「ぐ、ぐぬぬ…」

北条政子「もうお父ちゃんは引退して義時に任せるべきよ！お父ちゃん引退しなさい！」

北条義時「そうだよ。これからは政所の別当も僕が担当するから。」

こうして、北条時政は娘の政子と息子の義時によって伊豆に引退することになり、1205年に北条義時が親父の政所別当の地位を引き継ぐことになり、1213年には侍所別当にも就任することになるんだ。…あれ、ちょっと待てよ。侍所の別当って有力御家人の和田義盛が務めていなかったっけ？

その通り。でも、その和田義盛も北条義時と対立するようになり、1213年に和田義盛が北条義時に滅ぼされたことで(和田合戦という)、北条義時が政務一般を統括する政所別当と御家人を統率する侍所別当を兼任することになるんだ。そして、これ以降の政所別当と侍所別当を兼任することで將軍の政治を補佐する役職を執権と呼ぶことになる(前述のように違和感はあるだろうけど北条時政を初代執権、北条義時を2代執権とカウントする)。

調子に乗っていたら
政子にキレられて、
伊豆に引退じゃよ…



[北条時政]

[C] 源氏将軍家の断絶—テキスト P25 対応—

さて、ここで源氏将軍家と北条氏の系図を見よう。この系図を見てわかることは、源頼朝の血を引いている人間がほぼいなくなっているということ。すでに2代将軍の頼家は北条時政によって暗殺されているし、その頼家の子である一幡も殺されていて、残っているのは3代将軍の実朝と公暁(頼家の遺児)のみ。もし、ここで3代将軍の実朝と公暁が死んだ場合、源氏将軍家の血筋は断絶し、おそらく将軍の実家である北条氏の実権が確立されることになる。

そこで、何者かが「公暁を唆して、実朝を殺害させてしまおう」と考えた(この黒幕は北条義時説もあるんだけど、事件現場で公暁は北条義時も殺害しようとしているので可能性は低く、どちらも亡き者にしようとした有力御家人の三浦義村説もあるんだけど未だに真相は不明なので、ここは北条某としておこう…)

北条某「おう、公暁！久しぶりだな〜。」

公暁「おう！これは北条のオッサンじゃねえかよ、こんなところで何で来たんだよ！」

※鎌倉の地は湘南に含まれるので、公暁はお寺という施設に預けられて育てられたこともあって、バイクにまたがって峠を走るヤンキー化してしていた(かなり脚色あり)。

北条某「おお、公暁なんかずいぶんお前やさぐれちまったな〜。」

公暁「そりゃそうだろ。俺はガキの頃に親父がバイクで死んだってせいで、施設(お寺)に預けられて育ったら、こんなになっちゃったってわけよ？」

北条某「そりゃそうだよな。お前も親父さんがあんな殺され方をされたら、そうなっちゃうよな…。」

公暁「ん？ちょっと待ってくれ！俺の親父は若い頃にバイクで事故って死んだって聞いたぜ？」

北条某「な〜んだ、お前。お前親父さんの本当の死因聞かされていないのか？」

公暁「き、き、聞いてねえよ！俺の親父は誰かに殺されたっていうのか！？」

北条某「ああ、そうだぜ。お前の親父さんは殺されたんだよ。」

公暁「何だって！？そ、そ、それはいったい誰の仕業なんだよ！？」

北条某「ふっ…、教えてやるよ。お前の親父は実朝に殺されたんだぜ？(本当は北条時政だけど)」

公暁「マ、マ、マジかよ…！…ありがとよ、北条のオッサン！そんじゃ、ちよっくら実朝を殺しに鎌倉までひとつ走り行ってくらあ！！！」

北条某「実朝を殺したら、次の将軍はお前だぜ。ちよっくら実朝は今鶴岡八幡宮で右大臣就任の儀を終えている頃だから頑張るな！…(ふふふふふ、うまくいったぜ！)」

その頃、源実朝は鶴岡八幡宮(鶴岡を「鶴ヶ丘」や「鶴が丘」にするのは誤り)で右大臣拝賀の儀式を終えて石段を下っていた。そして、その石段の大銀杏の裏に隠れて待ち伏せしていたのが公暁だった…。

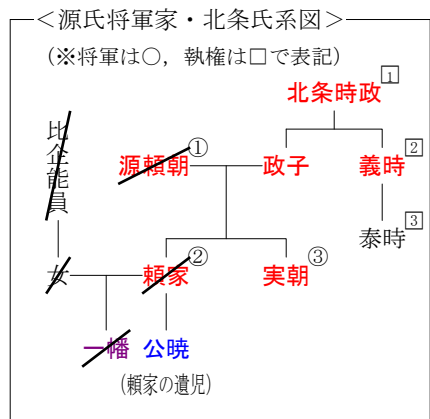
公暁「実朝め！よくも俺の親父である頼家を殺してくれたな！」

実朝「な、何を言っている！兄さんが殺された時に俺は13歳だぞ」

公暁「ふん、そんなん知るか！お前が死ねば次の将軍はこの俺だ！親の敵はかく討つぞ！」

実朝「ちよっ、そもそもお前の親父を殺したのは北条時政であって俺は何も…ぐ、ぐああ…！」

こうして1219年に源実朝は公暁に暗殺され、そして公暁も将軍暗殺の罪で討ち取られましたとき…。



＜源実朝の文化的業績＞

執権北条氏が政治権力を握られた3代将軍である源実朝は、政治に関わることができなかつた寂しさを紛らわすためか、学問や和歌などに励み教養に富んだ文化人として知られている。そして、公家文化を愛好して朝廷を重んじていたため、朝廷のトップである後鳥羽上皇も実朝のことを気に入り、鶴岡八幡宮で甥の公暁に暗殺される1219年には、実朝は27歳にして右大臣にまで昇進していた。

一方で、1198年から朝廷で院政を開始していた後鳥羽上皇も和歌の達人で、1205年には後鳥羽上皇の命で藤原定家(日記として『明月記』を記した)・藤原家隆が撰集した『新古今和歌集』(八代集の最後にあたる勅撰和歌集)が編纂されるが、実朝は同年(実朝13歳時)に『新古今和歌集』を京から運ばせている。さらに1209年(実朝17歳時)には自らの和歌三十首の評を藤原定家に請うて、1213年(実朝21歳時)には自らの私撰和歌集『金槐和歌集』を編纂している(銭ゲバの受験生が書きたがる「金槐」ではなく「金槐」なので注意)。なお、そんな和歌大好き青年の実朝を後鳥羽上皇も気に入っていたわけだけど、実朝を朝廷側に取り込むことで朝廷の権力回復を狙っていたという部分もある。

ただ、政治に関われない寂しさからか酒を飲みすぎて体調を悪化させることもあり、1214年には日本に抹茶を伝えた茶西(臨濟宗の開祖)から「お茶でも飲んで養生しなはれや」ってことで『喫茶養生記』を献上されている。それでも、実朝の好学ぶりは変わらず、1216年には学問留学のために渡宋を計画して、陳和卿(重源に従って東大寺大仏の首の修復にあたった宋の工人)の協力で鎌倉の由比ヶ浜で大船を建造してもらっている…が、結局その大船は進水に失敗(海に浮かばず)…。

ちなみに、以下の和歌は実朝が暗殺された当日に詠まれたとされるもの。

「出でて去なば 主なき宿と なりぬとも 軒端の梅よ 春を忘るな」

(私が家を出て行ってしまったならこの家は主人のいない家になってしまうけれども

軒先のうめたちよ、春になったら必ず咲いておくれ)

何か二度と戻れないことを知っていたんじゃないの?ってことを感じさせる歌だよね…。

こうして、源実朝・公暁ともに死んでしまったため、頼朝の血を引く源氏将軍家は断絶することになったんだけど、さすがに将軍がいない状態はまずい。そこで、鎌倉幕府は朝廷の後鳥羽上皇の皇子から将軍を擁立させてもらうことをお願いしたんだけど、後鳥羽上皇は断固拒否(後鳥羽上皇は条件として朝廷の命に従わない摂津国の長江荘・倉橋荘の地頭罷免を要求したが、幕府側がこれを拒否したことで朝廷・幕府間の関係は悪化し承久の乱の引き金となった)。しょうがないので頼朝の遠い親戚にあたる九条(藤原)道家(九条(藤原)兼実の孫)の子でわずか2歳の九条(藤原)頼経を4代将軍として連れてくることになるんだ(正式に九条(藤原)頼経が4代将軍に就任するのは9歳時の1226年)。

…おい、さすがにガキにも程があるだろ。でも、北条氏にとって将軍はあくまでも名目上として存在してあげればいいのか、その頼経の子である九条(藤原)頼嗣も1244年にわずか6歳で5代将軍に就任している(この九条(藤原)頼経・九条(藤原)頼嗣は摂関家の藤原氏(九条家)から迎えられたので、この2人を撰家将軍(藤原将軍)という)。

＜北条氏が将軍に就かなかつた(就けなかつた)理由(東大・京大・一橋大向け論述対策)＞

まず、中世以降における身分社会においては、天皇を中心とした身分秩序(身分意識)が存在しており、天皇・摂関家と並んで、武家の棟梁である征夷大将軍(将軍)にも貴種と呼ばれる皇族や源平藤橘(源氏・平氏・藤原氏・橘氏)といった高貴な家柄の者しか就任することはできなかつた。

ゆえに、北条氏は幕府権力の中核にはいるけど、もともとは伊豆の在庁官人出身で家柄の低い北条氏は将軍にふさわしくない身分だった。もし、ここで強引に北条氏が将軍に就任してしまうと、将軍と御家人の主従関係を基礎とする幕府秩序を自ら破壊してしまう可能性もあり、下剋上などがおこる危険性があるため回避しなければならなかつたわけだ。

＜撰家将軍の覚え方＞

- ①九条(藤原)頼経は鎌倉幕府創設のカリスマ的存在である頼朝・義経の2人から頼経
- ②九条(藤原)頼嗣はそれを嗣ぐ存在として頼嗣

そこで、幕府権力を保持するため、さらに幕府支配の正統性を示すため、貴種にあたる藤原氏から摂家将軍(藤原将軍)として九条頼経(4代将軍)・九条頼嗣(5代将軍)を擁立し、承久の乱(1221)後は同じく貴種にあたる皇族から皇族将軍(親王将軍・宮将軍)として宗尊親王(6代将軍)・惟康親王(7代将軍)・久明親王(8代将軍)・守邦親王(9代将軍)を擁立することで、摂家将軍・皇族将軍など朝廷の権威を利用したわけだ。

つまり、北条氏にとって将軍を擁立することで将軍の権威を独占しつつ幕府秩序を維持し、執権として実権を握る上で、名目だが将軍は幕府権力を保持する中で権力を行使するためには不可欠な存在だったわけだね(ただし、幼い頃は問題ないけど、成人して政治に関与しようとすると面倒になるので、九条頼経を1246年に、九条頼嗣を1252年に、宗尊親王を1266年に京都へ送還しているように、北条氏にとって危険になった場合は京都に追放している)。

なお、その一方で、北条氏に不満をもつ反北条氏勢力にとっての将軍は、幕府権力を奪取するための結集点という象徴的な存在であった(幕府は将軍と御家人の主従関係を基礎にしているため)。そのため、北条氏はこうした反北条氏を抑えるために、有力御家人を評定衆・引付衆などの権力機構に取り込むことで、押さえもうとしたんだ。

さて、何はともあれ九条(藤原)道家(九条(藤原)兼実の孫)の子の九条(藤原)頼経が4代将軍として京都から迎えられたんだけど、年齢はわずか2歳だったね…。そのため北条政子が頼経の後見役として将軍職を代行することになり、これ以降「尼将軍」と呼ばれるようになるんだ。

[D] 承久の乱ーテキストP25 対応ー

一方、この鎌倉幕府における動揺をチャンスとみたのが、朝廷で院政を行っていた後鳥羽上皇だ(お気に入りだった実朝は死んでしまったし、鎌倉幕府が自分に従わないことに不満を持っていた)。そこで、西面の武士(院御所の西面に詰めた上皇の警護にあたる直属軍団)を新たに設置した上で

「鎌倉幕府には2歳の幼子が将軍におるが、執権北条義時は我が物顔で政治を行っておる。これは謀叛というべきである。今こそ北条義時を討つてのじゃ！」

こうして後鳥羽上皇が1221年に発した北条義時追討の院宣をきっかけに(北条泰時ではない)、後鳥羽上皇による鎌倉幕府打倒を掲げた承久の乱が起きることになる。



〔後鳥羽上皇〕

<承久の乱の覚え方>

「人(1)に(2)ㄥ(2)ㄥ(1)ート承久の乱」

㊦ 承久の乱①ー後鳥羽上皇の北条義時追討の院宣ー『小松美一郎所蔵文書』

……勅を奉るに、近管関東の成敗と称し、天下の政務を乱し、将軍の名を帯ぶると 雖も猶以て幼稚の齡に在り。然る間彼の義時朝臣、偏に言詞を教命に仮り、恣に裁断を都鄙に致す。剩へ己が威を耀かし、皇憲を忘れるが如し。これを政道に論ずるに、謀反と謂ふべし。早く五畿七道の諸国に下知し、彼の朝臣の身を追討せしめよ。……

承久三年五月十五日

(……天皇からの命令を受けたところ、この頃関東の成敗(鎌倉幕府の命令)であると称して、天下の政治を乱している。かろうじて将軍(当時二歳の九条(藤原)頼経)の名がついているとは言っても、まだまだ幼齡に過ぎない。ところが、あの北条義時はもっぱら将軍家の言葉を借りて、勝手に都市や農村に裁定を下している。そればかりか自己の威勢を誇り、朝廷の定めた法令を忘れていたかのようである。これを正しい政治のあり方から糺してみれば謀反というべきである。早く五畿七道の諸国に命令を下して、かの北条義時その人を追討せよ(後鳥羽上皇が命じた)。)

承久三年(1221年)5月15日

なお、九条兼実の弟で天台座主(天台宗の最高位)の地位にあった慈円は、乱直前に『愚管抄』(末法思想と道理の歴史観に基づいた史論書)という本を後鳥羽上皇に提出して「鎌倉幕府が朝廷に反逆したわけではないですし、ただ鎌倉幕府が自分に従わないのが不満だけですよね。だから、後鳥羽上皇には道理(正当な理由・正しい筋道)がないですよ」って討幕挙兵を諫めようとしたんだけど、結局聞き入れられず承久の乱が起きることになるんだ。

話を鎌倉幕府の方に戻そう。朝廷のトップである後鳥羽上皇から「北条義時を倒せ」と命令が出されてしまったわけだから、鎌倉幕府の御家人内では大混乱だ。「鎌倉幕府という武家政権が出来上がったものの、日本の頂点である公家政権の朝廷から言われてしまったら、後鳥羽上皇の命令に従った方がいいのでは…」と御家人内でも動揺が走りまくる。

そんな中で尼将軍と言われた北条政子(史料文中では前述した二品)が動いて、御家人たちを集めて有名な演説が始まる…(史料をしっかりと読んでみよう)。



[北条政子]

㊦ 承久の乱②—尼将軍北条政子のよびかけ—『吾妻鏡』

(承久三年五月)十九日壬寅、……二品、家人等を簾下に招き、秋田城介景盛を以て示し含めて曰く、皆心を一にして承るべし。是れ最期の詞なり。故右大将軍朝敵を征罰し、関東を草創してより以降、官位と云ひ、俸禄と云ひ、其の恩既に山岳よりも高く、溟渤よりも深し。報謝の志浅からんや。而るに今逆臣の讒に依て、非義の綸旨を下さる。名を惜しむの族は、早く秀康・胤義等を討ち取り、三代将軍の遺跡を全うすべし。但し院中に参ぜんと欲する者は、只今申し切るべし者、群参の士悉く命に応じ、且つは涙に溺みて返報を申すに委しからず、只命を軽んじて恩に酬いんことを思ふ。

((承久三年(1221年)5月)19日壬寅、……二品(二位の尼のことで北条政子)は、御家人等を簾の下に招いて、秋田城介安達景盛を通じて、次のように言い聞かせた。「みな心を一つにして聞きなさい。これが最後の言葉です。故右大将軍(源頼朝)が、朝敵を征討し、関東を草創(鎌倉幕府)を開設して以後、皆が得た官位といい、俸禄のことといい、その御恩は山よりも高く大海よりも深い。それに対する報恩の志が浅くてよいものだろうか。ところが今、反逆者の讒言により、不当な綸旨(北条義時追討の院宣)が下された。名誉を重んずる者は、早く(朝廷側に加わった)藤原秀康・三浦胤義を討ち取り、三代将軍の残した所領や家を守りなさい。ただし、院側(後鳥羽上皇側)へ味方したい者は、只今申し出なさい。」という、そこに集まった家来たちはみな政子の命令に従い、一方では涙をたくさん流して返事をいうことも出来ず、ひたすらに命をかけて鎌倉幕府の恩に報いることを誓った。)

要約すると、「あなたたち御家人はこれまで故右大将軍(源頼朝)から山よりも高く海よりも深いたくさんの御恩をいただいてきたでしょう。そんな中、朝廷から非情な命令(北条義時追討の院宣)が下りました。その頼朝様の御恩に報いるときは今です。でも、院側(後鳥羽上皇側)に味方したい者もいるでしょう。いるのなら、今ここで名乗り出てください、悲しみに暮れながら送り出します…」

こんな演説を聞いて、後鳥羽上皇側につく者なんていないわけじゃないでしょ。「俺たち武士はこれまで貴族の犬だとか蔑まれてきたのに、鎌倉幕府が出来上がったおかげでようやく生活も立場も安定したんだ！お前ら、鎌倉幕府のために立ち上がろうぜ！！」と一人の御家人が叫べば、まわりの御家人も「うおおおお！！」って感じた。

こうして、朝廷側に寝返る武士はほとんどおらず、北条義時は北条泰時(北条義時の子)・北条時房(北条義時の弟)を総大将として派遣し(この時に北条泰時は途中で鎌倉に引き返して「もしも後鳥羽上皇が自ら兵を率いた場合はどうすればいいのですか？」と尋ねたら、義時は「朝廷に弓は引けない。鎧を脱いで弓の弦を切って降伏せよ。上皇が出陣してこなければ徹底的に戦え」と命じたときさる)、東海道・東山道・北陸道の三方から進軍した総勢190,000万の幕府軍の圧勝に終わったんだ。

なお、この承久の乱については、南北朝時代に南朝の正統性を示すために北畠親房が記した『神皇正統記』において、「上(後鳥羽上皇)の御咎(過ち)」であると断罪されてしまっている。

国 承久の乱③—南北朝時代における承久の乱論—『神皇正統記』by 北畠親房

頼朝高官ニノボリ、守護ノ職ヲ給、コレミナ法皇ノ勅裁也。ワタクシニヌスメリトハサダメガタシ。後室ソノ跡ヲハカラヒ、義時久ク彼ガ権ヲトリテ、人望ニムカザリシカバ、下ニハイマダギズ有トイフベカラズ。一応ノイハレバカリニテ追討セラレンハ、上ノ御トガトヤ申ベキ。……

(源頼朝が高い官職につき、総守護の職を給わったのは、すべて法皇(後白河法皇)自らの裁定である。不法に政権を奪い取ったものとはいえない。頼朝の未亡人(北条政子)もその跡を受け継ぎ、北条義時が長く政権を握って、人々の期待に背かなかったのであるから、臣下として非難すべき点があったとは言えない。通り一遍の理由ばかりで幕府を追討(北条義時の追討)されるのは、むしろ君主(後鳥羽上皇)の過ちというべきであろう。

[E] 承久の乱後の幕府の対応—テキスト P25 対応—

戦後処理として承久の乱の首謀者である後鳥羽上皇は隠岐に、順徳上皇は佐渡にそれぞれ配流されることになった(順徳上皇は順徳天皇であった頃の1213年に『禁秘抄』という有職故実書(「ゆうしよく」ではなく「ゆうそく」故実)とは朝廷の儀式や年中行事の作法を研究する学問)を著している)。そして、土御門上皇は承久の乱に何も関与していなかったのに、幕府も咎めるつもりはなかったのに「だ〜め!お父さんの後鳥羽上皇が島流しにされるのに僕が流されないのはや〜だ!僕も流して!」って言い出したので(超ドMやんけ)、土佐(のちに阿波)に配流されている。でも、幕府は土御門上皇に対しては阿波に宮殿を造営するなどかなりの厚遇をしていて、のちの1242年には土御門上皇の子である後嵯峨天皇が即位することになり(鎌倉中期に登場する)、幕府とも協調関係がとられていくんだ。

さらに、当時の仲恭天皇はわずか4歳であったんだけど、順徳天皇の子で後鳥羽上皇の血を引いているということで廢位となり、後鳥羽上皇と血のつながりのない10歳の後堀河天皇が即位することになった。

ただ、これら3上皇が配流され、幕府によって天皇が変えられたという出来事の歴史的な意義も押さえておかなければならない。これまでは西国を中心とした朝廷(公家政権)と東国を中心とした幕府(武家政権)が並立している公武二元支配が続いていたけど、この「3上皇の配流」・「天皇の廢位と即位」が幕府によって取り決められたということは、「幕府(武家政権) > 朝廷(公家政権)」という構図になり、権力の所在が朝廷から幕府に完全に移ったことを示している。まあ、論述的には「公武二元支配における朝廷に対する幕府の優位性が明らかになった」と記した方が格好いいけどね。

他にも後鳥羽上皇側に味方した武士などの所領3000カ所が幕府によって没収され、これらの新しい土地を把握するため、1223年には幕府が諸国に命じて田地の面積などを記録させた大田文(田数帳)という土地台帳が作成されている(「太田文」じゃなくて「大田文」なので気を付けて)。

<大田文の作成(超難関私大対策)>

土地台帳である大田文が作成されるようになったのは院政期からと考えられている。院政期に荘園公領制が成立すると、内裏造営・大嘗会・伊勢神宮の式年遷宮(伊勢神宮では20年に造替が行われる)などの費用調達に際して、国内の荘園・国衙領(公領)を問わずに一國平均役という臨時税が課されるようになった。その際に必要になったのが一國ごとに国内の田地の面積・領有関係などを記録した土地台帳である大田文であり、国衙が在庁官人に命じて作成されるようになった。

<3上皇の配流先の覚え方>

「巡查とツッチー父さんの大きい言葉」

→ 巡(じゅん=順徳)・査と(さと=佐渡)

ツッチー(土御門)・父さん(土佐)

大きい(隠岐)・言葉(ことば=後鳥羽)

鎌倉幕府が成立すると、地頭に御家人役を課するため幕府が各国の守護に命じて作成されるようになり、大田文は国衛と守護によってそれぞれ2種類作成されるようになった。そして、承久の乱で上皇側の所領3000カ所が没収されたことで、幕府による全国的な大田文の作成が進められたのである。

さらに、南北朝時代になると権限を強化された守護が国衛の行政機能を吸収するようになり、一国平均役の徴収権も守護大名に移り、守護大名が土地ごとに徴収する段銭へと名称を変えていくことになる(詳細は[南北朝の動乱]でも解説する)。

この幕府が没収した上皇側の所領3000カ所に、1223年に新たに補任(任命)された地頭を**新補地頭**という。まあ、承久の乱以降に新しく任命された地頭のことで、一方で承久の乱以前から任命されている地頭は**本補地頭**といわれる(従来からの土地支配を「本領安堵」される形で任命されたのが**本補地頭**で、承久の乱の活躍によって新しい土地を「新恩給与」の形で任命されたのが**新補地頭**)。

ただし、承久の乱以前からの本補地頭は「本領安堵」で先祖伝来の土地に住み着いているタイプなので、在地(現地のこと)における支配力が強いけど、承久の乱以降に任命された新補地頭は「新恩給与」の形で任命されたタイプで、朝廷から没収した西国に多く任命されることになったので、新規に土地である在地における支配力は弱いのが特徴。

＜本補地頭・新補地頭の違い＞

- ① **本補地頭**(本領安堵で任命される)
→ 在地における支配力は強い
- ② **新補地頭**(新恩給与で任命される)
→ 在地における支配力は弱い

例えば、君たちにお父さんと兄貴(長男)がいて自分は次男であるとしよう。そして、お父さんが承久の乱で活躍したことで、昔から関東に持っている土地(本領安堵された土地)にプラスして、幕府から新たに九州の土地(新恩給与された土地)を手に入れたとしよう。でも、お父さんは昔から住んでいる関東の土地から離れず、その土地は長男が相続することになる。そこで、お父さんから「幕府から九州の土地をいただいたから、お前(次男)は九州の土地の地頭として赴任しなさい」と新補地頭に任命されるわけだ。こうして、君たち(次男)は九州に新しく赴くことになったわけだけど、収入はどれくらいあるのかとか不安になるよね。そこで、**承久の乱**(史料文中では去々年の兵乱)から2年後の1223年に、**新補地頭**に対して出された給与規定を**新補率法**というんだ。

具体的な内容は、①段(反)別(1段(反)の土地につき)**5升**の**加徴米**の徴収権・②田畑**11町**につき**1町**の免田(税を免除された田)・③山川からの収益の半分で、丸暗記でも何とかできるけどちゃんと理解している受験生はほばいない。なので、以下の史料対策も含めてしっかりと解説しておこう。

㊦ 新補率法—新補地頭の設置—『新編追加』

去々年の兵乱以後、諸国の庄園郷保に補せらるる所の地頭、沙汰の条々

一、得分の事

右、宣旨の状の如くば、仮令、田畠各拾一町の内、**十町**は領家国司の分、**一丁**は地頭の分、広博狭小を嫌はず、此の率法を以て免給の上、**加徴**は段別に**五升**を充て行はるべしと云々。……

承応二年七月六日

前陸奥守判

相模守殿

(一昨年の兵乱(承久の乱)以後、諸国の庄園と公領の郷・保に任命された地頭(新補地頭)についての決定事項

一、得分(地頭に配分された収益・収入)について

右について、(先月出された)宣旨の内容によると、たとえば田畑各**11町**のうち、**10町**は領家や国司の取り分、**1町**は地頭の取り分とし、その土地に少々広い狭いがあっても関係なく、この比率(新補率法)で免田を地頭に与えた上、さらに**加徴米**として田畑1段につき**五升**を割り当てて支給するとのことであった。……

承応二年(1223年)7月6日

前陸奥守(執権北条義時)判

相模守(六波羅探題北条時房)殿

仮に田畑が11町あったとしよう(1町は面積単位で現在の1ha=100m×100m=10000㎡と同じ)。そして、この史料内では11町(11ha)の土地があったとしたら、そのうちの10町(10ha)はその土地の所有者である荘園領主 or 国司の得分(史料文中の言葉で収入にあたる)とし、残りの1町(1ha)は管理人の立場にあたる君たち地頭の得分(収入)として免田(税を免除する田)とする、としているわけだ。簡単にいえば、「土地が11あったとしたら、10は荘園領主 or 国司の収入で、1は地頭の収入として税は免除してあげる」と言っているわけだけど、その土地からとれる収入の11分の1だけで生活できるだろうか(できるわけではない)。

なので、それだけじゃ足りないから「加徴米(追加として徴収する米のこと)として(正誤問題の定番で兵糧米になっていたら誤り)、1段(反)の土地につき(これを段(反)別という)5升の米を徴収することを認める」と述べているんだ。また、面倒くさい土地の面積単位が出てきたけど、1段(反)とは律令制度で「1段(反)=360歩」と学習しているはずで、1歩は現在の1坪(畳2畳分で正方形の1坪になる)と同じぐらいの面積になるので、1段(反)は約360坪の土地と考えてくれるとわかりやすい。

さらに、1升は穀物をはかる時の単位。現在も「1升=10合」が交換単位として使われていて、「合」は君たちがご飯を食べる時の基準としても使っているよね(だいたい1食で1合食べるのが基準とされている)。そして、「升」は日本酒などの「一升瓶(1升分入る瓶)」でも使われている。もし「1升=10合」が本当か確かめたいければ、家にある「一升瓶」の中身を全部捨てて、米10合分と交換してみるといい(怒られても自己責任でよろ)。まあ、結局は「5升=50合」ということを言いたいわけだ。

では本題。1段(反)の土地につき5升の加徴米の徴収権というのは、「1段(約360坪)の土地につき5升(50合)」の米を追加で徴収することができるわけだけど、これは収入として多いか、少ないか? 結論から言うと少ない。だって、360坪ってそもそも結構な面積だよ(日本の一戸建て住宅の平均坪数は首都圏だと30坪ほど)。でも、360坪の土地からゲットできる米の量は5升(50合)なので、鎌倉時代の基準である1日2食(1日3食が定着したのは江戸時代中期)で生活しても25日しか持たない(もし、税が免除される免田として1町(10段)の土地があっても、50升(500合)なので250日しか持たない)。あとは山川からの収益の半分があるけど、本人だけでなく家族もいることを考えたら、生活はもっと苦しくなるはずだ。

ゆえに、西国に派遣された新補地頭の生活は基本的に苦しいことが多く、その収入の大部分は都にいる貴族などの荘園領主に納めなければいけない。それだったら地理的なことを考えてみるといい。自分は新補地頭として九州という現地の荘園に派遣され、その収入の大半を持っていく主人の荘園領主は京都などで暮らしている。だったら、水害が〜とか干ばつが〜とか適当な理由をつけて、年貢を滞納しちゃえばいいじゃないか(・∀・)? どうせ、君たちが派遣された九州の現地にまで荘園領主はやって来ないんだし(/ω・)/。こうした西国中心に派遣された新補地頭などによって行われた地頭による荘園領主への年貢滞納を「地頭の荘園侵略」という(詳細は[執権政治]で解説する)。

ラストは承久の乱を契機に、従来の京都守護にかわって六波羅探題という役職が設置されたんだけど、仕事内容は朝廷(公家政権)の監視・京都の警備・尾張(現在の愛知県西部)以西、鎌倉中期以降は三河(現在の愛知県東部)以西の御家人の統轄などになる。そして、この初代には先ほど承久の乱の総大将であった北条泰時(北方)と北条時房(南方)が任命されている。北条義時は承久の乱が鎮圧された後、2人にそのまま京都に留まって京都の朝廷を監視するよう命じているので、この2人はワンセットで出てくるんだ(のち、1225年に北条泰時が3代執権に就任すると、叔父の北条時房を執権の補佐役である連署に任命しているので、この2人はワンセットで3回登場すると考えてくれるとわかりやすいね)。そして、先ほどの新補地頭の設置(1223)に関する史料文でも、

「前陸奥守(執権北条義時)判 相模守(六波羅探題北条時房)殿」という文が最後に出てきたけど、これは from 「前陸奥守(執権北条義時)の判」 to 「相模守(六波羅探題北条時房)殿へ」という内容であることが「判」と「殿」から推察できるよね。